

卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和元年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	名古屋大学	整 理 番 号	1 8 1 0
プログラム名 称	未来エレクトロニクス創成加速 DII 協働大学院プログラム		
プログラム責任者	藤巻 朗	プログラムコーディネーター	天野 浩
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 入学学生のマインドセットの変革を目的として、1期生はシンガポール国立大学で、2期生はシンガポール南洋理工大学でそれぞれ初年次短期海外研修を行っている。学生も、グローバル社会における文化や価値観の多様性の存在を直接的なコミュニケーションを通じて感じ取るなど、従来の博士課程教育では獲得できない知見、能力を得られたと実感している。 ・ 学生に対して、カリキュラム履修面に加え、メンタル面でも学生相談・就職・キャリアパス室によるカウンセリング等丁寧なサポートが実施されている。 ・ 学長をはじめ、プログラム責任者やプログラムコーディネーター等の強い指導力と大学院改革への熱意と実行力の下で、立案したプログラムが計画どおり順調に遂行されている。 ・ 今後、長期インターンシップ等の教育を通じてさらに効果的な学生教育の実践が進むことが期待される。 <p style="text-align: center;">【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <p>本プログラムは電子デバイス分野とその応用分野を対象にしたものであるが、養成する人材像は分野に関わらず共通性の高いものであり、本プログラムのノウハウやカリキュラムは他分野においても活用できるものとする。まずは、この分野において実効性あるプログラムを確立することであるが、その際に、複数の博士課程教育リーディングプログラムで蓄積したノウハウや経験、採択された他の卓越大学院プログラムとの連携等を最大限活用し、新たに設置した博士課程教育推進機構の主導の下、本事業の主眼の一つである大学全体の大学院改革に向けて、本研究領域から工学研究科全体、さらには大学全体へと拡大する方策を具体的に明示しながら進めることが望まれる。</p> <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <p>①柔軟なコース選択とカリキュラム受講の仕組みの構築</p> <p>DIIにおける3つの人材養成像のそれぞれに特化したカリキュラムの設計や、学生の希望を基にしたコース選択、見直しは行われているが、5年間の教育の中で学生の能力や適性、指向は変化することも想定される。自ら選択したコースだけでなく他コースの経験や知見も有用であると思われ、学生にもそのような意欲が窺われる。3つの人材養成像に基づくカリキュラムを軸としつつ、本プログラムにおける更なる効果的な能力の涵養に資するため、あるいは学生のダイナミックな指向や希望に対応できるよう、一旦選択したコースによってカリキュラムを固定化せず、柔軟な履修方法やカリキュラムのローリングアップデート等の工夫を期待する。</p> <p>②応募学生及び博士課程進学学生の増加に向けた取組</p> <p>第1期の応募倍率が約1倍と報告されたが、今後はより多くの学生の応募と選抜による優秀な学生の確保の取組が望まれる。学生からは5年一貫の博士課程進学へのハードルが高いとの声があり、学生の意思決定のタイミングと合わせたリクルート、個別</p>			

の声かけや通知に留まらない積極的なプロモーション、具体的なキャリアパスの提示、5年一貫の博士課程進学やプログラム履修の魅力のアピールと経済的支援の詳細の案内などによる不安の除去など、要因分析まで掘り下げて有効な具体策を検討し対応することを期待する。

③ コミュニケーションの場・機会の設定

学生同士や学生と教員間のコミュニケーションの場や機会を設け、その中で提案された要望・課題をプログラムの改善に活用することが有効であると考えます。

④ 学位プログラムの構築・展開を通じた大学全体の大学院改革に向けた具体的な取組

大学院教育改革全体における位置付けを踏まえ、本プログラムにおけるどの取組をどのように他分野・領域に展開していくのか整理し、明確化していくことが望まれる。博士課程教育リーディングプログラムにおける分野・組織横断型の取組の豊富な経験や研究科等連携課程の仕組みなど、様々なリソースの活用も含めて、今後の大学院教育改革に向けた計画を早急に策定し、学内で認識を共有し、その中で本プログラムが担うべき取組が具体的かつ着実に進められていくことを期待する。

⑤ プログラムの履修に当たって学生に過度な負担が生じないような配慮

豊富かつ多様な教育プログラムが提供されているが、学生が専攻する研究科のカリキュラムとの両立に苦慮する可能性も否定できない。高度な「知のプロフェッショナル」の育成には、種々の社会課題や自らの研究において抱える問題を考察する時間的余裕も必要ではないかと思われる。学生からは負荷増分は休日や深夜などを使って吸収しなんとか両立できているとの意見があることも踏まえ、このような自己研鑽のための環境を確保するための配慮が必要である。

⑥ 人文・社会科学分野の知識や知見、思考能力の獲得のためのサポート

学生が様々な社会課題と向き合う中で、人文・社会科学分野の知識や知見、思考能力が必要となると考えられる。先述する学生とのコミュニケーションとの場も活用し学生の意欲等も確認しながら、本プログラムの掲げる人材の育成に必要な人文・社会科学分野の学修をサポートするための仕組みを整備することが必要と思われる。

⑦ 補助金で導入した設備備品の効果的な活用

初年度に補助金で導入した設備備品はデバイス分析・試作のためのものに偏っているように見受けられる。プログラム履修生が工学研究科全体に幅広く所属していることも踏まえ、本プログラムの取組を通じ履修生全体の教育・研究環境を計画的に整備するとともに、導入した設備等が効果的に活用されるよう努めていただきたい。上記の点について、博士課程教育推進機構が中心となって具体的に取り組んでいただきたい。そのために、今一度博士課程教育推進機構の役割についても整理されたい。